

# 編集後記

▼この頃の子どもの変わりざまの激しさに、親も教師も「自分が育てられたようにには育てられない」ことを痛感しています。しかし、「なぜか」と問われると答えはさまざまです。

特集「新潟県の少子化時代」は読者のみなさんがこのことをめぐって話し合われる一助になればと企画しました。

▼吉田武雄氏の「データでみる新潟県の少子化問題」では新潟県が二〇〇〇年（全国平均は二〇〇七年）に県総人口のピークをむかえる高齢化・少子化の進行の早い県であることを紹介しています。

また、「少子化」の要因についても厚生省や県ですら高学費負担による高学歴社会の到来で、子どもは多くは産めない、また高学歴の女性の社会進出で晩婚化が進んでいる、また子育てと仕事の両立の難しさもあるといっているを紹介しています。

▼座談会では幼年期から高校までの子ども像を子どもの発達各段階の保母・教師たちが教育現場で見たままスケッチした様子をまと

めました。

座談会の最初に出てくる乳幼児のお母さんたちのように地域の人達や園の保母さんと深い関わりのある方は「わが子を複眼的に『共育』できる条件を」をもっておられると思うのですが、孤立した中での「子育て」では学歴主義やその背景にある日本の企業社会の親と子への人権蹂躪の風圧をまろにかぶってしまおうようです。

▼嶋 倂司氏の「虫と酒と子ども」のお話の発想のゆたかさに講演をきいたみんなが引き込まれました。でも、時代を見る目、人を見る目、酒を見る目は科学者の厳しさとやさしさにあふれていました。

「六十になったら社長をやめて子どものことをやりたい」という素敵な社長さんと嶋さんの「虫と紅葉」の町づくり、そこに息づく酒造り万歳。

▼板橋育男さんが今年九月に出された次年度県公立小中学校教員の広域人事異動方針の非教育的な内容を伝えてくれました。今でも三年ぐらいでうごかされて、地域に根づくことができないでいる教師たちをさらに遠くに飛ばす発想はどうして出てくるのでしょうか。これに反対する校長会の要望はもつとです。

▼長井芳朗氏が「高等学校入学状況調査」資料」を詳細に分析しています。高校入試の方法の多様化が高校格差をさらにひろげているのです。中学生全員入学に近い高校進学率の中で、生徒数が急減していく今こそ、ゆとりある中学生の高校への受け皿づくりが求められています。

▼土田光男さんの「わらびっ子」を読んできてください。「綴り方教師」ということはを遠く感じるギスギスした心になりがちな今の学校です。こころをひらいた教師と子どもたちに出会えます。

## にいがたの教育情報 No. 52

1997年12月10日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明  
〒951 新潟市東中通1-86 山崎ビル  
電話・FAX (025) 228-2924  
振替口座・00640-0-12332  
印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。